学校NOW! 学校歳時記

新学習指導要領の「理解」を更に促進する

教育創造研究センター所長　髙階（たかしな）　玲治（れいじ）

1　新学習指導要領の理解は進んでいるか

平成29年度は新学習指導要領の「理解・徹底」の１年間だった。だが、どの程度「理解」は進んだであろうか。次の質問に果たして答えられるだろうか。

①「主体的・対話的で深い学び」が言われています。どうすれば「深い学び」と言えますか。

②学力の３つの柱の一つが「学びに向かう力」です。どのような「力」と言えますか。

③教育課程編成の基本に「教科等横断」の考え方が言われています。どのようなカリキュラムになると考えますか。

これら３つは新学習指導要領のキーワードであるが、「わかったつもり」になっていないだろうか。

実のところ、この３つのキーワードは説明が難しい。指導要領の「総則」を読んでも具体的に説明されていない。そこで、このような意味でないかと推測するが、その意味は深く、容易に把握できない。かなり実践する中で徐々に認識が深まっていく性質がある。

ただ、その説明と言えるものが、ようやく２月末に、『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説』として出版された。小学校のみであるが、『総則編』ほか各教科・領域編が出揃っている。少なくとも『総則編』はすべての教師が読むべきである。定価は各冊子とも170円程度の安さである。是非、活用したい。

特に『総則編』は、新学習指導要領の総括的な説明である。したがって３つのキーワードのみでなく、次期教育課程に向けた理念や必要とされる考え方が記述されている。さらに『各教科・領域編』は前回よりも厚くなり記述が詳しくなった。参考になることが多い。是非、読み通したいものである。

2　校内の共通認識をどう高めるか

ところで、すでに今年度から新教育課程の移行に入っているが、これからの教育実現に向けて校内の共通認識はどうであろうか。

現状では限界を超える多忙化のために、共通認識を持てる時間的余裕を無くしてしまっているのではないか。学校の教育課程が新しく変わっても、それぞれの教員に「理解」が任されているのが実際ではないか。

だが、個々の教員の受け止めだけでは十分ではない。例えば「コミュニケーションの２段の流れ論」という法則がある。

新学習指導要領を教員個々が読む。それは雨の降る状態に近く、そのままでは雨は地面に吸い込まれるだけである。理解が浅いままで過ぎてしまう。

それに対して、例えば「主体的・対話的で深い学び」の授業のあり方について教師集団で話し合う。すると、１人で考えていたよりもその授業の内容がかなり深まって理解できる。つまり、雨水は地面に吸い込まれずに個人や組織内にダムを造るのである。共通認識である。集団協議が理解を促進する。

何故、集団協議が必要なのかと言えば、同じ教員であっても、新学習指導要領の受け止めがかなり異なるからである。

年齢の差、実践経験の差、関心や意欲の差、積極的な受容の差、実践に生かす力量

差、などによって受け止めに差が生まれる。そのため『解説』を全員が読んだからといって、校内にただちに「共通認識」が生まれるという保証はない。

ただ、『解説』を個々が読むことは「理解」のベースになる。読みもしないで、「わかったつもり」という「自己流の実践経験」のみでは今後の実践を充実することができない。

『解説』はこれからの教育実践を示す貴重な情報源であって、自己流はやめて、校内にある程度の共通認識として高める必要がある。

さらに重要なことは、これからの学校教育は個々の教師の力量に任せるのではなく、自校の教育活動を全員で創りあげるという全員経営の考えが必要になる。学校の働き方改革による教員の多忙化軽減はその一環である。

３　「学習する教師集団」が教育を変える

これからの学校に期待するのは、従来と異なって、教師個々の多忙化がある程度軽減されて、教師本来の職務である子供や授業に向き合える時間が増えることである。そうした余裕が生まれれば、教育の課題への関心も高くなると予測できる。

ただ、恐らくは、『解説』を読んで、校内で協議しても、例えば「深い学び」も、「学びに向かう力」も、「教科等横断」も、その理解は十分でないであろう。

その理由は、これらの真の内実は、頭でわかるのではなく、実践して十分体得しなければ把握できないことである。実践しながら徐々に体得するという性質のものである。

ただ、そのような難しさはあるが、一応の内容理解を協働で行う必要がある。新年度に入っても多忙化の状況はあまり変わらず、十分な研究協議の時間を持てないのが実態であろう。したがって、新学習指導要領の主要なキーワードの共通認識を進めるには効率的な体制を考える必要がある。

例えば、「主体的・対話的で深い学び」は新学習指導要領のキーワードであって早い時期に共通認識を目指したい事項である。さらに、それ以外にも教員が認識をしたいと考える共通な文言がいくつかある。そうした文言を拾い集めて共通認識の手がかりを求める。例えば、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」「カリキュラム・マネジメント」「考え、議論する道徳」「学級指導のキャリア教育」、「各教科の特に変わった事項」などである。

ただ、それらの項目すべてについて独りで具体的に調べる余裕も、順番に協議する時間もない。そこで教員が１つ１つ分担する。そして調べた結果をＡ４一枚程度にまとめて配布する。その場合、紙面の形式は問わない。むしろ教師個々の自由な創意のあるプリントを尊重する。

次に配られた紙面を他の教師が読んで、質問等あれば書き込んで担当者に伝える。担当者はさらに修正し、新たに配布する。

このような行為は、校内で必要とされる課題解明に参画しているという協働意識が教師間に生まれる。課題の内容を調べ、効果的に説明する文書を創るという行為が情報検索や情報発信という教師のスキルを磨く。また、自分の書いた資料をみんなが読んでくれたことでさらに校内の一体感が生まれる。

研究協議のみが相互理解の場ではない。紙面を通してやりとりすることで、大切なコミュニケーションとなる。それが「学習する教師集団」としての一つのスタイルである。

今後は社会が変わる、教育が変わる。最近中教審から提示された『教育振興基本計画』は2030年を目指すとされ、「超スマート社会（Society5.0）」への展望がみえる。新たな教育への関心を持ち続ける教師でなければ、やっていけなくなるのである。